中国再訪

――序説・ジョシュア・フォーゲルにおける「中国再発見」の意義――

春名　徹

1.

ジョシュア・フォーゲルの「日本人の紀行文学における中国の再発見1862－1945)」(Fogel 1998) は，注目すべき労作である。しかし少なくとも日本の中国研究者のあいだでは，彼が近代における日本人の中国認識を「再発見」Rediscovery の過程として把えたことの意義は，充分には認識されているとは思えない。

本書の刊行直後の1998年にフォーゲル自身を招いて東京大学教養学部の並木頼寿の研究室で行われた研究会や，その後，中国研究所で小島晋治が行った講演でみるかぎりでは，フォーゲルがキイワードとして用いた「再発見」の意義は充分に認識されているとは思えない。『幕末明治中国見聞録集成』(ゆまに書房) の編者である小島にして，フォーゲルの著書の意義はせいぜいのところ日本人の中国紀行を網羅的に取り上げているという程度の認識ではないのか。

このような状況であってみれば，彼が強調する「再発見」の意義について覚え書をしたためることにも多少の意義はあるであろう。それは現在，歴史研究者が直面せざるを得ない〈読みなおすこと＝ふたたび見いだすこと〉という営為と不可分の位相にあるもの，と認識しているからに他ならない。筆者は批判的歴史主義の立場に立つものであるが，歴史主義はその立脚点そのものの位相によって，必然的に歴史叙述を行う歴史研究者自体を歴史的存在として相対化せざるを得ない。すなわちいま現在，歴史記述

を行っている歴史研究者自身が一定の歴史的な与件の枠内にしか存在し得ないこと，したがってその史料解読や歴史記述そのものも歴史的な枠内においてしか存在し得ないことを認めざるを得ない。歴史研究者の位置をこのように規定するならば，ここで認識論的なアスペクトは必然のものとなる。

フォーゲルの大著の全体像に言及するゆとりがないので，この小論では，フォーゲルが巻頭に置いた日本人の中国認識の出発点すなわち1862年の幕府による千歳丸派遣とその結果生じた直接の見聞にもとずく中国認識に限定して「再発見」の意義を考えてみた。フォーゲルは本書に先立つ一連のモノグラフィーのなかで，本書の第一章にあたる千歳丸についての論文を発表している。また，この小論では言及するゆとりがなかったが，近代の（中国・日本）関係のなかで，中国の側からの「再発見」にかんして論じてもいることを指摘しておくべきだろう（Fogel 1995）。

2.

フォーゲルは，この著述の範囲を1862年から1945年に設定した。これは適切な時代設定といえよう。1862年は日本の文久二年，中国では同治元年に相当する年であり，幕府が開国後，最初の公式使節――厳密にいうならば貿易事情調査のための官船――を上海に送ったのであった。近世のいわゆる「鎖国」制度のもとで，日本人の海外渡航は禁じられていたから，少数の漂流民の経験をのぞけば，日本人が合法的に中国に渡航し，直接にその風土に接したのは，1862年が最初であった。しかもこの使節団の参加者は，上海にかんする自分たちの見聞にかんして相当数の記述を残している（春名・1987）。適切な選択とは，そのような意味である。なおフォーゲル自身は，この時期が，日本（幕府）・中国（清朝）ともに凋落期にあったこと，そして日本は明治維新という改革に成功し，中国では改革が成功しなかったという対比的な意義をも認めている。

ちなみに日本人の異文化体験としては，この上海行は1860年の万延遣米使節団（新見豊前守一行）に遅れること二年，1862年の文久遣欧使節団（竹内下野守一行）と同年にあたる。開国は，欧米の圧力のもとで行われたため，日本においては対外関係の更新は主として西欧との関係で意識され，アジア諸国との関係の更新にかんしては注意がおろそかになる傾向がある（春名・1987）。その意味で1862年を「再発見」の最初の年と位置づけることには二重の積極的な意義があるといえよう。

千歳丸の関係者自身が，自分たちの経験の歴史的な意義を認識していた。「官吏ノ台命ヲ受テ故ラニ入唐シ玉フハ室町氏以来ノ希有ノコトナレハ此行ニ預カル者皆自ラ奇異ノ思ヒヲナス豈一大愉快ナラスヤ」（名倉予何人「海外日録」）。

名倉の認識は千歳丸一行の認識のなかでもいささか大時代であることは認めざるを得ないが，なおかつ歴史的意義の把握は的確であったといい得る（春名・2001B）。

また終末時期としてフォーゲルが1945年としたことも妥当といえる。いうまでもなく同年は日本がほかならぬ中国そのものにたいする侵略戦争に敗北した年である。対象にたいする権力関係の変化は当然のことながら認識の変化を生むであろうからである。

ちなみにその後の国際的な政治環境の変化のもと，中国そのものにおける政権の交代（1949年の中華人民共和国の成立と中華民国の台湾への亡命）があり，日本が平和条約の締結をしないまま，中国への日本人の渡航はふたたびきわめて限定されたものとなった。この事態そのものが近世日中関係の再演という角度から把握し得るものと考えているが，いずれにせよ，それは本稿の範囲を超えている。

さらに付言するなら，1862年という上限は，フォーゲルの設定した「日本人の紀行文学にあらわれた」という限定のもとにおいては認め得るが，近世日本人の中国にたいする直接認識の上限は，限定的ではあっても漂流

民のそれを考察対象にすべきではないかと考えている。それは漂流民の経験＝民衆の経験と考えて疑わない山下恒夫や小林茂文のような民衆拝跪論者の気楽な議論（山下・1998／小林・1993および1999）に組するものではなく，近世の日本においては民衆の経験もまた知識人の言説を経て記録されざるを得なかったという現実をふまえてこのようにいうのである。

3.

まず，千歳丸関係者の記述の範囲を確認しておこう。

千歳丸の派遣の社会的歴史的意義についてはくりかえさない。本航海にかんする標準論文である（春名・1987）を参照のこと。同船には操船にあたった前船長のイギリス人以下の乗組員を別にして日本人51名が乗組んでいた。江戸役人５人・従者８人，長崎地役人（医者を含む）７人・従者９人，長崎会所役人３人・従者３人，賄方６人，水夫４人である（春名・1987）。このうち記録を残したのは，商人松田屋伴助の日記と長崎地役人（中村良平か）の断片的な公式記録をのぞけば，ことごとく従者の名目で参加したものたちの記述である。この傾向は万延遣米使節（1860）から文久の二次にわたる遣欧使節（1862，1863）ごろまでの初期の使節団に共通する。その意味で対外見聞が「従者たちの」経験といわれる所以である（松沢弘陽・1974）。

現在，知られるものは従者の記録である納富介次郎，日比野輝寛，高杉晋作。長崎商人松田屋伴吉の他，春名が翻刻した峰（春名・1998），中牟田（春名・1997），および準備中の名倉にかんする草稿（春名・2001B），中牟田の別記録（春名・2001A）を含めて８人が知られている。このうち最後にあげた中牟田の別記録は，むしろ公式記録を転写したものとみなし得る。その意義についての検討は今後の課題となる。

このうちフォーゲルが言及しているのは納富介次郎，日比野輝寛，高杉晋作，松田屋伴吉である。

近世において日本人はそれまで中国の土地を直接に踏むことはなかった。いわゆる「鎖国」政策によって，日本人の海外渡航が禁止されていたからである。歴史学的には「鎖国」の用語の妥当性にたいする疑念が提出されて久しいが，ここで日本人の認識を論じる範囲であるならば，筆者がかつて提示したように「主観的な階層的国際秩序」と「国際情報の国家管理」を現象としてあげれば足りるであろう。

すくなくとも異文化認識ということにかんしていうなら，直接，異文化のなかに入って認識するという方法を放棄したこと，それゆえ異文化は知識として（主として書籍のかたちで）移入したものを通じて把握されたということである。

他方でこういう知識人的な認識の一方では，異文化は民衆レベルの認識では〈通過するもの〉でもあった。私がかつて提起したところの〈パレードとしての異文化〉である。幕府は階層的秩序（小中華意識）のもとで，異文化に属する外国が，幕府の権威に服属儀礼をとるもの，すなわち権力者の権威を荘厳するものとして位置づけていた。したがって民衆にこの行列を見聞させることに意味があった。しかし現象として異文化はオランダ人行列，朝鮮人行列，琉球人行列等々，民衆の前をひたすら通過するものとして顕現した。たしかに直接的な見聞は，限定されたもので，長崎，対馬から江戸への幹線道路上にかぎられていたが，近世の文化状況のなかでそれらの見聞は見聞録，評判記，瓦版，錦絵の類として広く伝播した。朝鮮にかんして知識を与える通俗本『寛永漂流記』や『朝鮮物語』が朝鮮通信使の来訪の時期に刊行されていることは例証となろう。

またこれらの直接的見聞を何らかの形で秩序化する上で「目利き」の機能が発揮された。つまりは対象を分類し，一定の価値観にもとづいて評価をくだすという態度である。その背景にはおそらく近世における小生産の発展と日常生活のあらゆるレベルで商品が浸透して来たことと関連する。――さしあたり私の発想に形を与えてくれた論文として（横山・1976）を

参照されたい。

以上の前提のもとに，中国認識にかんするかぎり，直接の見聞という意味で千歳丸の経験は「再発見」と位置づけられるのである。

4.

しかし直接の見聞というものの意味も正確に測られねばならぬ。〈記述されたもの〉による知識から〈直接の見聞〉に転換したからといって即座に認識が改まるわけではない。それは私たちの認識そのものが〈制度〉に組み込まれているからに他ならないからである。

ここでは認識を規定する〈制度〉を「異文化に対する既成の価値観」および「時間意識」という二点に限定して考えてみることとする。 既成の価値観とはまず儒教という枠組みである。

衛藤瀋吉は「日本人の中国観」(1970) において，この時点で活字化されていた記録の主なものを網羅して高杉晋作，納富介次郎，日比野輝寛を題材に論考を試みた。そこで衛藤は，比較的感性的な観察から出発し，「感心かたこと」「嘆いたこと」「清国の士大夫」「清国の庶民」「なぜ清国は衰えた」「殷鑑遠からず」などの項目にしたがって整理し，価値の体系化を試みた。さらに竹添進一郎の『桟雲峡雨日記』や宮崎滔天『三十三年の夢』を援用して，明治期の日本人の中国観一般の萌芽を読み取ろうとする。それ自体もさることながら，衛藤はじつは千歳丸の直接見聞もまた儒教的な価値観という〈制度〉のもとで整理，統合されているという事実を無意識のうちに証明する結果になっている。

フォーゲルの考えもこれに似ている。彼は千歳丸の認識を具体的にならべて行って，ほぼ衛藤と同じ認識に達している。

また佐藤三郎は，より具体的に千歳丸に乗り組んだ「藩士たちの経験」を，上海の繁栄，混乱と不潔，難民の惨状，アヘン害の浸透，官人の堕落，軍事事情の観察，長髪賊と英仏軍，日本人に対する中国人の期待と歓迎，

漢字文化圏内の一体感，中国対策観，に分けて要約している（佐藤・1984）。意識的とはいえないが，佐藤もまた認識の枠組みとして既成の文化的価値を置くのである。

5.

つぎに時間の質について考えたい。上海紀行に限らず，開国後の日本人の外国紀行――代表的なものは『遣外使節日記纂集』（日本史籍協会叢書），『万延遣米使節史料集成』，松本弘陽編『海外見聞集』などで見ることができる――はともすれば記述が平板である。もとより語学的な限界にもとずく異文化とのコミュニケーションの不足を指摘することは容易である。外に対して開かれなかった精神が内にむかえば，日常的な記述（どこへ行ったか，何を食べたか等々）に陥ることは見やすい道理であろうから。

しかしその共通する平板さの基礎には，時間の感覚の相違が横たわっているのではないか。近世の日本においては周知のように時間は不定時制すなわち昼夜均分制をとった。その土地における夜明け（天文時による日の出の36分前）と日暮れ（日没の36分後）を昼夜の分界点として各々を六等分する。現実には相当の伸縮が生じる。そのことは知識としては知っていても，現実にどのように近代の時間と相違していたかは，あまり認識されているとはいいがたい。

不定時制は，その地の夜明けと日暮れに対応する地方時間であるから，現代の『理科年表』に示されている代表的な地方都市の標準時に依拠した日の出と日没から算出するには，球面三角法を援用しなければならないので煩雑な手続きが必要となる。幸い伊能忠敬の地図観測に関連して越中（富山）における不定時法の時間が判っている（竹内慎一郎・1999）ので，これを例にとる。富山における夜のもっとも長い冬至（現代の暦で十二月二十二日）の「夜明け」（明け六つ）は午前六時二十四分，「日暮れ」（暮れ六つ）は，午後五時十八分であるから，昼間は10時間52分，夜は13時間08分

となる。すなわち昼間の一刻は１時間49分，夜は２時間11分である。逆に夜がもっとも短い夏至（六月二十一日）の明け六つは午前三時五十六分，暮れ六つは午後七時五十四分であるから昼は15時間54分（一刻は２時間40分），夜は八時間06分（一刻は１時間20分）となる。

ついでながら，初期の時計は，機械的に複雑な構造（要するに重りを動力源にする場合，腕の長さの異なるテンプを備え，昼夜でそれをかけかえることによって不定時制に対する「相対的均質性」に対応させたのである。それは自然への対応に機械的均分を従属させようとする試みであったように思われる。

この圧倒的な時間感覚の相違は，もっと意識されてしかるべきだろう。ベネディクト･アンダソンは,その『想像の共同体』The Imagined Communities において，国民国家とは想像の産物であると定義したことによって衝撃をもたらした。しかしここで問題としたいのは，むしろ彼が結論を導くにいたる過程である。彼は Nationalism を定義するにあたって，それが政治的に強大な影響をもつものであるにもかかわらず，哲学的には貧困で支離滅裂であるという事実を指摘し，より丁寧にそれが三つのパラドックスをともなうことを指摘する。そしてそのことを媒介にして想像された政治的共同体 Imagined Political Community としての Nationalism の位相を明確化しようとする。

ここでは彼がそこで重視した文化的な基礎についてみる。彼は文学を重視するのだが，その文学とは小説と新聞である。ここでは詳しくは触れぬが，アンダソンは本来，インドネシア社会の分析から出発した研究者であるから，ヨーロッパの近代国家とラテン・アメリカ，さらにフィリピンの独立運動におけるホセ・マルティの啓蒙活動を視野に置いている。この立場からするとリテラシイとしては小説と新聞が「国民という想像の共同体の性質を表示」する技術的手段に他ならない。

さらに詳細に彼はこれらのものが前提とする近代的な時間というものの

成立に着目する。アンダソンはある架空の小説の枠組みを提示し，A，B，C，Dの四人の人物を登場させる。A，Bは夫婦，C，Dは独身の男女，そしてAとCのあいだには性的関係があることを暗示した上で，彼はたとえば，AとDは互いに面識もないし，小説のなかで会うこともない，にもかかわらず小説が成立するのは，近代的な均質な時間が背景にあるからだ，とする。

そこで彼はベンヤミンを援用して「均質で空虚な」近代的な時間の成立そのものが，歴史的であることを強調する。それを補強する意味でアウエルバッハの『ミメーシス』第一章，もはや古典的ともいえる古代の叙事詩と聖書の黙示的な文体の対比を援用する。ホメーロスの描写の叙事詩における時間の流れ（オデッセウスの傷痕）と聖書における時間の流れ（創世記第22章のヤコブの供儀）の時間の流れを対比した上で，ヤコブの供儀，すなわちエホバの命によってヤコブがわが子イサクを燔祭の供物としようとする行為をイエスの架刑への告知，約束であるとする関係は，水平的次元では理性によって確立することはできない，というきわめて印象的な描写を引用している。ベンヤミンならば，これを「メシア的な時間」すなわち即時的現在における過去と未来の同時性とよぶだろう。

このような要約の仕方は，あるいはアンダソンを亜流のポストモダニストと誤解させかねないことを恐れるが，インドネシア史の研究者として「言語と権力」など，卓抜なモノグラフィイの上に立脚した彼の立場は，当然にも西欧近代とは異質の時間感覚をもつ社会の存在を知覚していたはずで，それ故にこそ説得性をもつのである。

時間の問題は，より素朴に『時間の比較社会学』においてレヴィ＝ストロースを引きながら非近代的な時間のあり様を指摘した真木悠介を想起してもよいかもしれない（真木悠介・1981）。

さらにアンダソン自身は自覚していないようだが，彼が仮想した小説は，近代的な均質な時間というだけではなく，必然的に都市小説の傾斜を帯び

るであろうことも，注目に値するのではないかと考えている。近代の時間と都市という凝縮された空間――それはさらに吉見俊哉が示唆するように（吉見・1987），演劇的空間でもあると理解しているが――とは，相互に関連する。

6.

フォーゲルのいう「再発見」の最初の例となった千歳丸の経験は，上海という都市を対象に行われた。日本人の言説の最初の対象としての上海について，考えてみたい。フォーゲル自身の考察からいささか離れるかもしれないが，彼が総体としての「日本人の中国に対する記述」を対象としている以上，上海にかんして特筆することは必ずしも逸脱とは思えない。

より正確にいうなら，上海にかんする日本人の言説（ディスクール），より厳密にいうなら上海という対象にかんする言語化の系譜における位置づけである。歴史学，文学の対象として上海について，なかんずく歴史的存在としての上海について語ることが，改めて盛行している。その発端として千歳丸の経験が論じられる傾向も増大しつつある。

現実の開放政策のもとに，いちじるしい景観の変化のもとにある上海と，歴史的な存在としての複合都市上海とのあいだで大きな乖離が生じつつある状況のもとで，このような現象が起こりつつあること自体が考察の対象となり得るだろう。そして上海にかんする言説が，いちじるしくレトロリスペクティブな傾斜を帯びつつあること，総体として論じようという態度がみられないこと，に現在の問題があるように思われる。

都市景観は，都市への想起力を与える大きな要因である。現実に上海の景観が劇的に変貌した状況のもとで，上海にかんする想念が懐古的な傾斜を帯び，とめどもなく自己増殖を始めること自体が考察の対象たり得るが，そのことはしばらく措く。レトロリスペクティブな傾斜は人文科学にいたずらにルサンチマンを持ち込むことによって理性的認識の基盤を破壊しか

ねないため，克服の方法を見いだしたいと考えていることを指摘するにとどめる。

また一つには歴史学と文芸批評的な立場との方法的な相違に由来するかもしれないのだが，言語化された総体よりも，たんに入手しやすい資料にもとずいて記述する傾向がある。すでに劉建輝『魔都上海』と和田博文らの『言語都市上海』にかんする書評でのべたことだが〔千歳丸の記録が〕「同時代には非公開だった高杉〔晋作〕日記のみをとりあげ，おそらくもっとも流布したであろう名倉予何人の記録を無視するのは夭折した維新の立役者の言説は陋巷に窮死した名倉のそれよりは見映えがいいからだろうか」(『文学』2000年9・10合併号)。仮にそうであるならば，それは最早，学問研究の埒外の問題であろう。

〔注ならびに参考文献〕

Anderson, Benedict ; The Imagined Communities, Reflections on the Orgin and Spread of Nationalism. Revised Edition, Verso, London, New york 1991.

初版にもとずく邦訳は白石隆・白石さや訳『想像の共同体――ナショナリズムの起源と流行』(リブロポート　1987年)／改訂版は同じ訳者で『増補　想像の共同体――ナショナリズムの起源と流行』(ＮＴＴ出版　2000年)。初版を邦訳，改訂版を英語で読んだが，白石訳で定着した訳語はそれにしたがった。改訂版の意義については語るべき多くの事があるが，本書で論じた範囲では初版と改訂版にはほとんど違いがない。

なお東南アジア史家としてのアンダーソンにかんしては中島成久訳『言葉と権力――インドネシアの政治文化探究』(日本エディタースクール出版部　1995年)を参照。同訳書の日本語版序文にはアンダソンの自己形成をうかがうに足る貴重な個人史が含まれている。

Auelbach, Erich ; Mimesis--The Representation of Reality in Western Literature, (Transration from the German by Willard Trask) Doubleday & Company, INC. Garden City, New York, USA. 1957.

邦訳は篠田一士・川村二郎『ミメーシス』(筑摩叢書1967年)。いま，ちくま学芸文庫（1994年)。蛇足ながら『世界古典文学全集』第一巻ホメーロス（筑摩書房　1959年）の月報に篠田が連載で『ミメーシス』を紹介しはじめた時の新鮮さ

は忘れ得ない。オデュッセウスの傷痕とヤコブの供犠の対比に衝撃を受け，篠田の親切な教示を得てアンカーブックのペーパーバックを入手したことを記憶している。感傷でいうわけではない。文学以外のジャンルでアウエルバッハやベンヤミンを援用して認識を発展させようという努力が開始された時代を確認しておきたいからである。

Fogel, Josua A.; The Literature or Travel in the Japanese Rediscovery of China, 1862- 1945. Stanford University Press,Stanford, Califolnia, USA.

Josua A. Fogel; The Cultural Dimension of Sino-Japanese Relations. --Essays on the Nineteenth and Twentieth Centuries. M. E. Sharpe, Armonk, New York USA. London, England.

衛藤瀋吉「日本人の中国観── 高杉晋作らの場合」／『仁井田陞博士追悼論文集』第三巻「日本法とアジア」（勁草書房　1970年）

小林茂文「漂流と日本人── 漂流記にみる異文化との接触」／『海と列島文化』別巻「漂流と漂着」（小学館　1993年）。

同　『ニッポン人異国漂流記』（小学館　1999年）本書は1993年論文を増補したものである。

佐藤三郎「文久二年における幕府貿易船千歳丸の上海派遣について」／『近代日中交渉史の研究』（吉川弘文館　1984年）

竹内慎一郎『地図の記憶── 伊能忠敬・越中測量記』（桂書房　富山市1999年）。本書の富山における不定時法時刻は保柳睦美によるもの。

春名　徹「1862年幕府千歳丸の上海派遣」／田中健夫編『日本前近代の国家と対外関係』（吉川弘文館　1987年）

同　「峰潔の上海体験」／『調布日本文化』（調布学園短期大学日本語日本文化学科紀要）8号　1997年

同　「中牟田倉之助の上海体験」／『国学院大学紀要』第35巻／1997年

同　「中牟田倉之助の上海経験再考」／『国学院大学紀要』第39巻／2001年3月〔予定〕2001A

同　「過渡期の一知識人における異文化接触の意味── 名倉予何人の場合」／『調布日本文化』12号　2001年3月〔予定〕。2001B

真木悠介『時間の比較社会学』（岩波書店　1981年）

松沢弘陽「さまざまな西洋見聞」／『西洋見聞集』（日本思想大系66）（岩波書店　1974年）。

山下恒夫編『石井研堂これくしょん近世漂流記集』六巻（日本評論社1992～3年）。山下の思考法はこの編著の解説に色濃く現れている。

横山俊夫「『藩』国家への道── 諸国風教触と旅人」／林屋辰三郎編『化政文化の研究』（岩波書店　1976年）
吉見俊哉『都市のドラマトウルギー』（弘文堂　1987年）